

田 近 洵 一・浜 本 純 逸・大 槻 和 夫 編

『たのしくわかる高校国語Ⅰ・Ⅱの授業』

本書は、「まえがき」に述べられているよ 徒の国語科離れ・授業形式のパターン化と  
うに、現在の国語教育が抱える、児童・生 いった問題の克服に向かい、さらには科学

技術の発達や情報化・国際化の進展などの社会の急激な変化への対応を目指しており、これからの国語の授業の可能性を切り開いてゆく国語教師にとって、指標となるべき実践事例の集大成と言え、啓蒙の書となるものである。

各編とも、構成は「Ⅰ 実践の指標」、「Ⅱ 実践事例」、「Ⅲ これからの実践と研究」の三部からなっている。巻頭の「実践の指標」と巻末の「これからの実践と研究」では、編集代表の三氏を含む国語教育研究の第一人者たちによって、それぞれのジャンルに応じた目指すべき国語教育のありかたが教示されている。

以下に現場の第一線で活躍されている実践者による「実践事例」において扱われている教材の主なものを挙げる。

「Ⅰ 文学」では、『羅生門』・『いころ』・『山月記』など伝統的教科書教材の実践事例をはじめ、「詩」・「現代俳句」・「俳句」の授業事例が紹介されている。「自己と人間社会への認識を深める」目標のもとに文学の表現の学習が位置付けられる。<sup>2)</sup> 説明・論説・作文」では、教材として『日

本文文化の雑種性』・『体験を伝えるということ』・『レトリック感覚』・『無情ということ』・『近い旅・遠い旅』の説明・論説教材の授業例を掲げるほか、小論文・作文の指導や、単元学習の実践事例という視点で、言語の教育としての国語教育という視座から、広くことばの学習について考えさせられるものとなっている。<sup>3)</sup>

古典については、『今昔物語集』・『徒然草』・『枕草子』・『源氏物語』・『平家物語』・『万葉集』・『古今和歌集』・『新古今和歌集』・『西鶴』・『史記』の実践事例を紹介して、「古

典俳句(芭蕉・一茶)・「漢詩」の授業もレポートされており、受験のため仕方なく古典を読まなければならない不幸」から、「古典を読むことのできる幸福」へと学習者を導くことが目指されている。

実践報告のそれぞれに、執筆者の熱意と創意をありありと感じ、国語の授業について自身の認識を改めさせられる三冊である。

(所 康俊)